HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パミールのイスマーイール派 ： 認知されざる諸民族、宗教共同体としての将来
Author(s)	カランダロフ, トヒル; KALANDAROV, Tokhir; 宇山, 智彦//編訳・序文・注釈 他
Citation	日本中央アジア学会報, 13, 25-37
Issue Date	2017-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.13.25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88321
Type	journal article
File Information	JB013_002kalandarov.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

特別寄稿

パミールのイスマーイール派
── 認知されざる諸民族、宗教共同体としての将来 ──

カランダロフ・トヒル
編訳・序文・注釈：宇山　智彦

編訳者序文

タジキスタン東部の山岳バダフシャン自治州、およびアフガニスタン、中国、パキスタンの国境地域にまたがって住むパミール諸民族（パミール人）は、中央アジアの中で特異な存在である。他の中央アジア諸民族が、テュルク系または西イラン（ペルシア）系の言語を話すスンナ派ムスリムであるのに対し、パミール諸民族は東イラン系の言語を話し、多くはイスマーイール派ムスリムである。

パミールの人々の独自性を形作る重要な要素であるイスマーイール派の信仰をこの地に広めたのは、現タジキスタン南西部出身で、ファーティマ朝治下エジプトに滞在してイスマーイール派の宣教者となり、晩年を現アフガニスタン領バダフシャンのユムガーンで過ごしたナースィリ・フスラウ[1]（1003/4年生まれ、1072年から89年の間に没）であるというのが一般的な理解であり（Каландаров［2004: 46–47］など）、彼は現在もパミールで大変尊崇されている。ただし既に10世紀にサーマーン朝治下の中央アジア各地でイスマーイール派は一定の勢力を持っており、パミールにもその影響が及んでいた可能性がある。また後世、特に12～13世紀にもバダフシャン周辺でイスマーイール派の宣教活動が盛んになった時期があり、パミールにおける同派の定着をどの程度ナースィリ・フスラウの力に帰することができるのかは、検討の余地がある［Васильцов 2014］。パミールの歴史自体、史料および研究の不足のため未解明の部分が多い。

いずれにせよイスマーイール派は、中央アジアにおいても世界的にも、しばしば偏見の対象となってきた。特に11～13世紀頃にスンナ派が敵意をもって描いたこの宗派の像がその後ヨーロッパに伝わり、イスマーイール派といえば過激な「暗殺教団」であるという

[1] 彼については多くの文献があるが、手引きとして森本ほか［2003］の解題が有益である。

イメージがいまだに存在する。しかしこれはもともと不確かな伝説であるうえ、この宗派のあり方は時代と共に変化している。現代のイスマーイール派は、教義に関する秘密主義という面は保ちながらも、ヨーロッパに住むアーガー・ハーン4世による近代的な指導体制を確立させ、アーガー・ハーン財団などを通じてパキスタン、タジキスタンをはじめとする諸国で開発援助事業を進めている(2)。カランダロフ氏が後述するように、イスラーム以外の宗教の痕跡を残す地方的な習慣も、ある程度の規制をしつつ認めており、いわゆる原理主義・過激主義とはほぼ無縁である。

パミールの峻険な地形が、独自の言語・宗教・文化を保つのに役立ってきたことは間違いないが、パミール人は決して孤立した歴史を生きてきたわけではない。周辺諸勢力・国家による征服・支配に翻弄され、特にスンナ派による圧力に耐えながら、時に諸勢力・国家間の関係を左右する独自の役割を果たしてきた。19世紀末にパミールはイギリス・ロシア両帝国間のグレートゲームの最後の舞台となったが、現地、特にシュグナンの有力者たちはゲームの駒の役割に甘んじず、アフガニスタンやブハラの支配に抵抗しながら、ロシアと巧みな駆け引きを行った［宇山 2016: 129–130; Шохуморов 2008］。ソ連時代にはパミールの人々は教育熱心で知られ、タジキスタンの研究機関やKGB（国家保安委員会）、内務省などの要職に進出した。ソ連時代末期に民主化運動・自治運動で存在感を示したのち、パミール人の多くは、タジキスタン独立後の内戦（1992–97）でタジキスタン・イスラーム復興党や民主党と共に反政府側に立ち、政府側武装勢力の攻撃対象となった［Dudoignon 1998］。同時に、パミール人政治家たちはパミールへの内戦の広がりをできるだけ防ごうとし、早い時期から政府側と反政府側の和解を模索して、のちの和平の先駆けとなった［Uyama 2010: 67–71］。

このようにパミール人は文化的独自性も社会的・政治的活発性もかなり高い集団であり、しかも彼らを中心とする自治州が1925年以来存在しているにもかかわらず、不思議なことに、ソ連・タジキスタンにおいて多くの場合正式の民族とは認められず、タジク人の一部として扱われてきた。その理由については今後本格的な研究を待たなければならないが、背景としては、タジク人側の同化志向と、宗派間の違いを目立たせないようにするという意図や、パミール人自身が古くから文章語・共通語としてはペルシア（タジク）語を用い、スンナ派や十二イマーム派の人々に対して自らの信仰・アイデンティティを隠すことが多かったという事情が考えられる。中国で、タジク族と呼ばれているのが実はパミール諸民族のサルコル人やワハン人であるという現象も、恐らくソ連の民族名称の影響であろう。

(2) パキスタン北部のイスマーイール派に関する本格的な研究として、子島［2002］がある。アーガー・ハーンを頂点とする組織の浸透や開発への関与といった面でパミールとの共通点もあり、興味深い。

パミール人に関する研究は世界的に見ても多くはないが、近年、ソ連の民族学や歴史学の流れを受け継ぎながらパミール人研究者たちが成果を発表しているほか、欧米で開発学的な視点からの研究が現れている（たとえばBliss［2006］）。本稿編訳者は2006年8～9月に、内戦史の調査を主目的として、ハルグ（山岳バダフシャン自治州の州都）を含むタジキスタン各地を訪れた。その際、フランス人研究者ステファン・デュドワニョン氏から、パミール人研究者ウメド・ママドシェルゾドショエフ氏を紹介され、彼が18世紀から20世紀初めにかけての多くの貴重な史料を個人で所蔵していることを知った。これが縁となって、ママドシェルゾドショエフ氏と河原弥生氏によりこれらの史料の研究が進められ、史料のファクシミリと解説が東京で刊行された［Kawahara and Mamadsherzodshoev 2013–15］。河原氏と澤田稔氏、稲葉穣氏はまた、2009年夏と2011年夏にパミールを訪れ、史料調査のほか、泉や岩などの聖地、廟や礼拝所などの建造物を詳細に観察した［澤田 2013: 21–42］。このように日本人研究者もパミール研究に貢献しているが、まだ散発的であり、特にパミール人とパミール地域に関する基礎知識が、学界で十分に共有されているとは言えない。

このような状況を鑑みて、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターは2015年10月から2016年3月まで、パミール出身でロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所の上級研究員を務めるトヒル・カランダロフ氏を、特任教授として招いた。氏は、近年はタジキスタンからロシアへの労働移民とロシア社会との関係というアクチュアルなテーマを研究しているが、もともとパミール諸民族のうち最大のエスニック・グループであるシュグナン人に関する総合的な歴史・民族学研究を行ったことで有名である［Каландаров 2004］。

2016年1月23日、日本の研究者・市民にパミール諸民族の歴史・慣習・宗教に関する情報と知見を提供することを目的に、東洋文庫特別講演会（イスラーム地域研究東京大学拠点共催）で、カランダロフ氏に「パミールのイスマーイール派：過去と未来の間で Памирские исмаилиты: между прошлым и будущим」と題する講演をお願いした。本稿は、この講演のロシア語資料をもとに、今後の研究に役立つよう参考文献の情報を氏に提供していただいてまとめたものである。講演という性格上、資料では説明が省略されている部分があったため、氏が依拠した文献や氏の著作をもとに、編訳者が補った箇所も多い。注はいずれも訳注である。

講演内容からは、パミール人の独自の文化の魅力と、民族集団として国から認知されないながら、国外からの指導を受け国家とも折り合いを付けて、宗教共同体としての将来を切り開いていこうとする人々の姿が浮かび上がってくる。本稿が、スンナ派の世界からだけでは見えてこない中央アジアの地域像を理解する鍵となる存在である、パミール人・パミール地域の研究を志す人を増やすことに役立つなら、幸甚である。

はじめに

タジキスタン共和国の山岳バダフシャン自治州に位置する高山地域の谷間には、パミール諸民族が住んでいる。シュグナン人（地方グループのバジュイ人を含む）、ルシャン人（フーフ人を含む）、バルタング人（ロショルヴ人［オロショル人ともいう］を含む）、ワハン人、イシュカシム人、ヤズグレム人、ゴロン人である。彼らは東イラン系の諸言語と独自の文化を古くから保っている。2014年1月現在、この自治州には21万2100人が住み、そのうち70%の14万8600人がイスマーイール派である[3]。ソ連崩壊とそれに伴う経済破綻を経て、パミールでは宗教復興が始まった。本稿では、パミール諸民族の民族学研究と人口調査の歴史に触れたのち、イスラーム化以前の要素を含む宗教生活と近年の宗教改革、そしてパミール人の将来を論じたい。

表　山岳バダフシャン自治州の人口

	人口[4]	自治州人口に対する比率
ハルグ（ホログ）市	28 800人	13.6%
シュグナン地区	35 400人	16.7%
ラシュトカルア地区	25 400人	12.0%
イシュカシム地区	30 500人	14.4%
ルシャン地区	24 500人	11.6%
ヴァンジ地区	31 700人	14.9%
ダルヴァズ地区	21 700人	10.2%
ムルガブ地区	14 200人	6.7%
山岳バダフシャン自治州計	212 100人	100.0%

出典：Агентство по статистике при Президенте Республики Таджикистан. 2014. *Численность населения Республики Таджикистан на 1 января 2014 года*. <http://stat.tj/ru/img/b417f44e3113e555ffff3cd143d5b3fe_1404816557.pdf>

パミール人に関する民族学研究の先駆者たち

学問的な意味でのパミール諸民族の人類学・民族学研究は、1901年に始まった[5]。これは、アレクセイ・ボブリンスコイ伯爵（1861–1938）とミハイル・アンドレーエフ（1873–1948）と

(3) 山岳バダフシャン自治州西部のダルヴァズ地区とヴァンジ地区はスンナ派のタジク人、東部のムルガブ地区はクルグズ人が主に住む地域である。また、ヴァンジ地区のヤズグレム人は、言語的にはパミール系だが、宗教的にはスンナ派である。

(4) 原資料で人口の十の位以下が四捨五入されており、地区の人口および比率を単純に合計しても、自治州全体の数と一致しない。

(5) 1870年代以降、ロシアの軍人や学者がパミール探検・調査を盛んに行ったが、主に地理や動植物を対象とするものであった［宇山2013］。

いう、2人の偉大なロシア人研究者の名前と結びついている。

1901年12月15日、帝立モスクワ考古学協会東方委員会（フセヴォロド・ミッレル議長）の会議において、ボブリンスコイは1895年に始まる自らのパミール訪問の旅行記を発表した。ボブリンスコイの報告は活発な議論を呼び、東方委員会の委員たちは彼に、早く資料を印刷し公刊するよう求めた(6)［Протоколы 1903: 219］。ボブリンスコイ自身が後に、「この地方の研究を急がなければならない。なぜなら、あらゆるものを呑み込むヨーロッパ文化がこの地に触れ、それゆえすべての独特で個性的・特徴的なものを殺し始めているからである」と述べている［Бобринской 1908: I］。

同じく1901年にタシケントでアンドレーエフは、グリャム・シャーという名の、出稼ぎに来ていたと思われるパミール出身者と出会い、現ルシャン地区に位置するフーフ渓谷についての最初の情報を彼から得た。1907年にロシア人として初めてフーフ渓谷に立ち寄ったアンドレーエフは、「巨大な山塊に閉ざされた渓谷の興味深く独特な景観に私は驚き、住民の生活に関心を持ち始め、この僻遠の渓谷の生活に関する資料を集めるために改めて現地に行こうと決意した」と述べ、1929年と43年に本格的な調査を行った［Андреев 1953: 8–9］。

ソ連国勢調査に見るパミール諸民族――アイデンティティに関する語りと政治

ソヴィエト連邦が成立してから最初の全連邦国勢調査である1926年国勢調査では、調査票に「民族（ナロードノスチ）」と「母語」の欄があり、民族のリストにはワハン人、イシュカシム人、シュグナン人とヤズグリャム（ヤズグレム）人が含まれていた。しかし6人のワハン人以外、これらの民族名を名乗った者はいなかったとされている。ただし母語としては、1019人がヤズグリャム語、9人がルシャン語、また各6人がワハン語とシュグナン語を挙げていた［ЦСУ СССР 1928］。

イヴァン・ザルービン(7)が編集して1927年に刊行されたソ連諸民族リストでは、イシュカシム人、ワハン人、シュグナン人、ヤズグリャム人がそれぞれ独自の民族として挙げられ、シュグナン人のサブグループという形でルシャン人、バルタング人、オロショル人も触れられていた［Зарубин 1927: 10–11］。

1937年国勢調査の準備の際にБ. М. グランデ教授が公刊したソ連諸民族リストでは、シュ

(6) ボブリンスコイは1902年に、前年夏にシュグナンの3人のピールと会って得た、パミールのイスマーイール派に関する情報を小冊子にまとめて刊行している［Бобринской 1902］。彼の3度にわたるパミール調査については Худоназаров［2013］参照。

(7) ザルービンは言語学者・民族学者で、1914年からたびたびパミールをはじめとする中央アジア各地で調査を行い、ソ連におけるパミール研究・タジク研究の確立に貢献した［Рахимов 1989］。

グナン人とルシャン人が「シュグナン・ルシャン人」という1つの民族にまとめられ、1931年のデータによる人口は約2万3000人とされた。シュグナン・ルシャン人には17という番号が付けられ、17aのワハン人（約4500人）、17бのヤズグリャム人（約2000人）、17вのイシュカシム人（約500人）と共に記されていた［Гранде 1936: 76］。リストを掲載した『革命と諸民族』誌はこのテーマに関する討論を提案し、これに応じたЛ. クラソフスキーは次のように述べた。

> ［データの］刊行の際に、小さな民族が消えてしまう時があるということを考慮しなければならない。たとえば1926年、パミール諸民族の一つであるワハン人は、全連邦で6人しか登録されず、タジク人に合併された。しかしもちろんこれによって、ワハン人が別個の民族として存在する権利が否定されたわけでは全くない。ここでは、ワハン人や他の「山岳タジク人」の大部分をタジク人そのものから区別することのできなかった国勢調査の記録係に従い、自らの無力を認めて、他の大勢が埋まり込んでしまった先であるタジク人にこれらのワハン人を入れるしかなかったのである［Красовский 1936: 69］。

同じく1936年の『革命と諸民族』誌で、カザフ人政治家のナジル・テュリャクロフ（トレクロフ）は以下のように述べた。

> ワハン人の例を見てみよう。考えられるのは2つに1つである。① 1926年に記録者たちは何らかの理由で現実を歪め、ワハン人を6人しか登録しなかった。この場合はワハン人とタジク人の言語・文化・習慣・経済面の関係を見定め、ワハン人の本当の数を明らかにし、リストの中で相応の地位を与えなければならない。②記録者たちはワハン人の数を正しく判定した。ワハン語は方言ではなく、独自の言語である。この場合、6人では独自の民族集団を形成できないことは明らかであるから、彼らを最も近く大きな周辺民族（национальное окружение）に思い切って含めることが可能である［Тюрякулов 1936: 72–73］。

結局、1937年国勢調査の結果は、スターリンが不満を持ち(8)、欠陥があると見なしたため公表されず、責任者たちは迫害された。1939年に改めて行われた国勢調査の準備用の民族（ナツィオナーリノスチ）リストには57の民族名が記載され(9)、58番目が「その他」とされた。

(8) 1937年国勢調査によるソ連の人口は、農業集団化に伴う飢饉などを反映して、スターリンらの予想を大きく下回るものとなった。調査結果のうち文書館に保存されていたものは、1990年以降、順次公刊されている。

(9) 1926年国勢調査の集計用リストではソ連全体で約200の民族名が挙げられていた。しかしソ連の民族政策が、少数民族の自治や母語使用の権利を積極的に唱える方向から、民族間の同化・融合を肯定的に見る方向へと変わっていく中で、1936年にスターリンは、ソ連には60の民族がいると発言した。1939年国勢調査用の民族リストは、このスターリン発言に沿って作られたものである［マーチン 2011: 495–496］。

パミール諸民族はタジク人の番号の中に含められた［Жиромская и др. 1996: 25, 138］。

1959年の全連邦国勢調査の際には、すべてのパミール諸民族がソ連諸民族リストに記載されていたが、同時に、「自称が対応する基本的民族名称」が示されていた［ЦСУ СССР 1959］。つまり、調査対象者がパミール諸民族のいずれかに属すると申告すると、これは自称と見なされ、自動的にタジク民族の数に入れられたのである。同様の状況は1979年国勢調査でも繰り返された［ЦСУ СССР 1978］。ゴルバチョフによるペレストロイカの時代である1989年に行われた全連邦国勢調査では、パミール諸民族が「自称」であってタジク人の一部と見なされるという扱いは変わらなかったものの、10万1000人以上の人々がパミール諸語のいずれかを母語とすると回答した［Моногарова 2001: 47; Болдырев 1990: 37］。

タジキスタンが独立しても、パミール諸民族がタジク人に入れられる状況は変わらなかった。2010年の国勢調査によれば、タジキスタンにはコングラト人、カタガン人、ユズ人、バルロス人、セミズ人[10]などが住んでいることになっていたが（セミズ人は全部で47人しか記録されなかった）、パミール諸民族は記載されなかった。しかも、調査票には母語の項目があったにもかかわらず、結果によれば、誰もパミール諸民族の言語を母語として申告しなかったことになっている［Агентство 2012: 11］。

他方、ロシア連邦では、2010年国勢調査の準備用民族リストに、総称的カテゴリーとしての「パミール人」が登場した［Тишков 2011: 26］。結果的に、363人が総称としてのパミール人を名乗ったのである[11]［Росстат 2012: 16］。

パミール諸民族の宗教観 ── ゾロアスター教の影響を中心に

パミール人の宗教はイスマーイール派のイスラームを核としながらも複合的なものであり、歴史的に他の宗教や信仰の特徴もかなり現れている［Литвинский 1981; Давлатбеков 1995; Каландаров 2000］。それは第1にアニミズム、特に先祖の霊への崇敬であり、パミール人にとって最も恐ろしい呪詛は、「お前を死者の魂が罰するがよい」という怒りの言葉である。第2にトーテミズムであり、たとえば「犬の種族」を意味するサグゾト Sagzot というシュグナンの氏族名にそれが現れている。第3に仏教であり、特にインドからの仏教伝道者と中国からの巡礼者の通り道だったワハンでは、仏教の影響が強かった［Литвинский 1968］。第4に太陽信仰（ミトラ教）であり、太陽の名にかけた誓いや、太陽に関係する聖地は、現在に至

---

(10) これらの集団は通常、ウズベク人の部族と見なされている。

(11) カランダロフ氏の推計では、2005年初め頃、ロシアには約3万人のイスマーイール派パミール人移民がいた［Каландаров 2005: 7］。彼らの多くは他の中央アジア南部出身者と同様、法的地位の不安定な労働移民であって、国勢調査に答えた率は低く、その中でもパミール人と名乗った者はごく一部だったと考えられる。

るまでパミール各地に広く見られる。第5にゾロアスター教であり、以下、これについて具体的に検討してみたい（中央アジア全体におけるゾロアスター教の影響については、Bekhradnia［1994］、Foltz［1998］、Scott［1984］参照）。

ゾロアスター教の諸要素は今日に至るまで保たれているが、特にそれが明瞭なのは、葬式・追善儀礼においてである。よく知られているように、ゾロアスター教において大地は「清浄」、遺体は「不浄」と見なされるため、両者が触れ合わないよう、遺体の下に草を敷いていた（東パミールのサカの墳丘墓で死者を草の下敷きの上に寝かせていたことについて、Литвинский［1972: 132］参照）。墓の側壁を石で覆うことも、ゾロアスター教儀礼の保持を物語っている。このようなタイプの墓は、石造ダフマの原型と考えられる。ゾロアスター教でダフマ(12)とは、遺体を屋外に置いておくための場所を意味する。注目すべきことに、この言葉（ヴァルター・ブルーノ・ヘニングによればアヴェスター語で納骨所を意味するas(t)-da-na［Шкода 2009］）からオストンостонという言葉が現れ、現在もパミール諸語で聖堂を意味するのである。仮説的に言えば、パミールの現在のオストンは、かつてパミール人ゾロアスター教徒の納骨所の役割を果たしていたのかもしれない。

シュグナン人、ルシャン人、バルタング人の埋葬儀礼には、今日に至るまで、いくつかのゾロアスター教的要素が保たれている［Kalandarov and Shoinbekov 2008］。後述のチャラーグ・ラフシャンに見られるように［Лашкариев 2008］、イスマーイール派パミール人の埋葬・追善儀礼で火を多く使うことが、その代表的な例である。

パミールにおけるイスマーイール派ルネッサンスとアーガー・ハーン4世による改革

ソ連において、イスマーイール派の信仰は他の宗教と同様抑圧されたが、特に痛手だったのは、1936年にアフガニスタンとの国境が閉ざされ、隣国の同信者たちや、当時インドのムンバイにいたアーガー・ハーン3世との接触が断たれたことだった。

パミールのイスマーイール派の歴史に新しいページを開いたのは、1995年5月にアーガー・ハーン4世（1936–）が来訪したことである。この地のムリード（弟子）たちにとって、イマーム（最高指導者）の最初の拝顔（ディーダール）が実現したのである。

歴史を振り返ると、1310年にイマームのシャムスッディーン・ムハンマドが亡くなった後、イスマーイール派の共同体は、カースィムシャー分派とムハンマドシャー分派に分かれた(13)。

(12) ヨーロッパ諸語や日本語で沈黙の塔とも呼ばれる、鳥葬施設。

(13) イスマーイール派はそれまでにも数度の分裂を経験しており、ここでカースィムシャー分派とムハンマドシャー分派に分かれたのは、そのうちのニザール派である。これらの分岐を含め、イスマーイール派の歴史について詳しくはDaftary［1990］参照。

16世紀初めにバダフシャンのイスマーイール派は拝顔の儀式を行ったが、その相手は興味深いことに、ムハンマドシャー分派のイマーム、シャー・ラズィーアッディーンであった。18世紀になって、バダフシャンのイスマーイール派共同体は、ムハンマドシャー分派からカースィムシャー分派に最終的に移行したのである。

ソ連崩壊後、パミールを世界のイスマーイール派に再統合するにあたり、アーガー・ハーンの宗教組織であるイスマーイール派タリーカ・宗教教育委員会（ITREC: Ismaili Tariqah and Religious Education Committee ／現 ITREB: Ismaili Tariqah and Religious Education Board）は、構造的・イデオロギー的な困難に直面した（以下、アーガー・ハーンらによるパミールでの改革については、Каландаров［2006］、Mastibekov［2014］、Собирова［2003］参照）。構造的な困難とは、アフガニスタンやパキスタン北部と異なって、パミールではソヴィエト時代初期にピール（導師、伝教師。地方の宗教指導者）の制度が破壊されたことである。ピールの代わりを果たしていたのはハリーファ（代理人。村レベルの宗教職能者）だが、彼らは現地の共産党指導者によって任命されていたのだった。

イデオロギー的な困難とは第1に、ソ連時代の無神論教育だった。宗教実践は年配者しか行っていなかったのである。第2は、人生儀礼で用いられる宗教的テキストの中に、シーア派[14]的な教えのモチーフが混ざり込んでいたことだった。イスマーイール派の教えに合わせて、テキストを統一し編集する必要があった。第3に、パミールの諸地域における宗教儀礼のシステムも統一されていなかった。たとえば追善の際に燈明を燃やす儀礼であるチャラーグ・ラフシャンを、一部の住民は夜半までに、他の人々は明け方に行っていた。第4に、ハリーファたちの宗教知識のレベルが低く、彼らのためにITRECが特別なセミナーを組織しなければならなかった。こうした困難を克服し、地方行政府とも協力しながら、ITRECはかつてのピール制度に替わって、信徒の指導・教育の役割を担うようになっていった。

アーガー・ハーンの影響は、祈禱にも現れた。1995年、パミールのイスマーイール派の間で、「ピール・イ・シャー[15]」という名で知られた古い祈禱に代わって、「ドゥアー・イ・ムバーラク」（祝福された祈り）という新しい祈禱が普及し始めたのである。信者たちがタジク語で唱えていた古いテキストと異なり、新しい祈禱はアラビア語で唱えられている。「ドゥアー・イ・ムバーラク」は6つの部分から成り、「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において」という言葉で始まって、クルアーンのさまざまな節を含み、アリーからアーガー・ハーン4世まで

---

[14] カランダロフ氏がシーア派と言っているのは十二イマーム派のことである。形成の歴史的経緯から言えばイスマーイール派もシーア派の分派であり、イスラーム研究でもアーガー・ハーンらの見解でもそう位置づけられているが、パミールでは別のものと認識されることが多いようである。

[15] ナースィリ・フスラウが書いたとされるこの祈りについてはКаландаров［2004: 303］参照。ここではピールは預言者ムハンマド、シャーはその娘婿アリーを指すという。

の49人のイスマーイール派イマームの名への言及で終わる。

2009年3月20日には、結婚式（ニカーフ）の新しい方式に関するアーガー・ハーンのファルマーン（布告）が出され、世界中のイスマーイール派の結婚儀礼の方式が統一された。同じ年の7月11日にイマーム（アーガー・ハーン）はチャラーグ・ラフシャン儀礼に関する規定の変更を承認した。主な新機軸は、パミールのイスマーイール派がこの儀礼の際に伝統的に行ってきた羊を生贄に捧げる儀式と並んで、死者の家族が1日の断食を行うことや、共同体のためにボランティア活動を行うことも可能にしたことである。つまり、不幸に見舞われた家族は、これら3つの中からどれを選ぶか、自分たちで決められるようになったのである。この新方式を導入した後、イマームは、歴史的にチャラーグ・ラフシャン儀礼を実践していなかった地域、たとえばインドでも、イスマーイール派がこの儀礼を行うことを可能にした。

タジキスタンのイスマーイール派共同体の将来

2009年10月12日、アーガー・ハーン4世とタジキスタンのエモマリ・ラフモン大統領の臨席のもと、ドゥシャンベに、内部に礼拝堂を併設したイスマーイール・センターが開設された[16]。この社会文化施設は、これまでにロンドン、リスボン、ヴァンクーヴァー、トロント、ドゥバイに設置されており、ドゥシャンベのセンターは世界で6番目となる。ただし、イスマーイール派共同体としての宗教祈禱がここで行われ始めたのは、アーガー・ハーンが礼拝堂で儀式を司るムキーを任命した2012年4月からであった。

タジキスタンの平等主義的なイスマーイール派共同体は、将来も順調に発展していけるだろうか。これを左右する要因の一つは、タジキスタンの社会が世俗的であり続けるか否かである。奇妙に聞こえるかもしれないが、他の宗派から迫害を受けてきたイスマーイール派の歴史が示すように、現代においてもイスマーイール派共同体は、イスラーム社会よりも世俗社会においてよりよく発展できるのである。イスラーム社会において宗教的多元主義は社会的・政治的にあまり有効なファクターになっておらず、時には宗教的多様性が全く許されないことさえある。もう一つの要因は、イスマーイール派の精神的・世俗的最高権力であるイマームによるハイブリッドな指導体制が、タジキスタンのイスマーイール派共同体の問題・難問をどのくらい解決していけるかであるが、これは時が示すことであろう。

[16] https://www.youtube.com/watch?v=P3ecnjAClBE

参考文献
（露語）

Агентство по статистике при Президенте Республики Таджикистан. 2012. *Национальный состав, владение языками и гражданство населения Республики Таджикистан*. Т. III. Душанбе: Агентство по статистике при Президенте РТ.

Андреев М.С. 1953. *Таджики долины Хуф (верховья Аму-Дарьи)*. Вып. I. Сталинабад: Изд-во АН ТаджССР.

Бобринской А.А. 1902. *Секта исмаилья в русских и бухарских пределах Средней Азии: Географическое распространение и организация*. М.: А.А. Левенсон.

————. 1908. *Горцы верховьев Пянджа (ваханцы и ишкашимцы)*. Очерки быта. М.: А.А. Левенсон.

Болдырев В.А. 1990. *Итоги переписи населения СССР*. М.: Статистика.

Васильцов К.С. 2014. Из истории исма‘илитского призыва в Бадахшане // *Таджики: история, культура, общество* / Сост. Р.Р. Рахимов. СПб.: МАЭ РАН. С. 190–210.

Гранде Б. 1936. Список народностей СССР // *Революция и национальности*. № 4. С. 74–85.

Давлатбеков Н. 1995. *Доисламские верования населения Западного Памира (по материалам русских исследований)*. Душанбе: Ориёно.

Жиромская В.Б., Киселев И.Н., Поляков Ю.А. 1996. *Полвека под грифом «секретно»: Всесоюзная перепись населения 1937 года*. М.: Наука.

Зарубин И.И. 1927. *Список народностей Союза Советских Социалистических Республик* / Сост. под ред. И.И. Зарубина. Ленинград: Изд-во АН СССР.

Каландаров Т.С. 2000. Религиозная ситуация на Памире (к проблеме религиозного синкретизма) // *Восток*. № 6. С. 36–49.

————. 2004. *Шугнанцы (историко-этнографическое исследование)*. М.: ИЭА РАН.

————. 2005. *Памирские мигранты-исмаилиты в России* (Исследования по прикладной и неотложной этнологии. № 178). М.: Ин-т этнологии и антропологии РАН.

————. 2006. Исмаилизм на Памире: поиск новых путей и решений // *Расы и народы: современные этнические и расовые проблемы. Ежегодник*. Вып. 32. М.: Наука. С. 180–196.

Красовский Л. 1936. Чем надо руководствоваться при составлении списка народностей СССР (в порядке обсуждения) // *Революция и национальности*. № 4. С. 67–71.

Лашкариев А.З. 2008. Поминальные обряды очищения дома и возжигания священной лампады у исмаилитов Западного Памира // *Этнографическое обозрение*. № 1. С. 97–109.

Литвинский Б.А. 1968. Среднеазиатские народы и распространение буддизма (II в. до н.э. – III в. н.э., письменные источники и лингвистические данные) // *История, археология и этнография Средней Азии*. М.: Наука. С. 128–135.

————. 1972. *Древние кочевники «Крыши мира»*. М.: Наука.

————. 1981. Семантика древних верований и обрядов памирцев // *Средняя Азия и ее соседи в древности и средневековье: История и культура* / Под ред. Б.А. Литвинского. М.: Наука. С. 90–121.

Моногарова Л.Ф. 2001. Ассимиляция и консолидация памирских народов // *Среднеазиатский этнографический сборник*. Вып. IV. М.: Наука. С. 47–55.

[Протоколы] 1903. Протоколы заседаний Восточной Комиссии Императорского Московского Археологического Общества за 1900–1903 гг. // *Древности Восточные. Труды Восточной Коммиссии Императорского Московского Археологического Общества*. Т. 2. Вып. III [особая пагинация].

Рахимов Р.Р. 1989. Иван Иванович Зарубин (1887–1964) // *Советская этнография*. № 1. С. 111–121.

Росстат. 2012. *Итоги Всероссийской переписи населения 2010 года в 11 томах*. Том 4. Книга 1. М.: ИИЦ «Статистика России».

Собирова К.Д. 2003. *Вклад фонда Ага Хана в восстановление экономики и решение социально-культурных проблем ГБАО Республики Таджикистан*. Диссертация канд. ист. наук. Душанбе.

Тишков В.А. 2011. О всероссийской переписи населения 2010 года: разъяснения для ретроградов и националистов и предупреждения для чиновников и политиков // *Этнологический мониторинг переписи населения* / Под ред. В.В. Степанова. М.: ИЭА РАН. С. 15–30.

Тюрякулов Н. 1936. Список народностей СССР (в порядке обсуждения) // *Революция и национальности*. № 8. С. 72–74.

Худоназаров Д.Н. 2013. *Памирские экспедиции графа А.А. Бобринского 1895–1901 годов: этнографический альбом.* М.: Наука.

ЦСУ СССР. 1928. *Всесоюзная перепись населения 17 декабря 1926 г.: краткие сводки. Вып. 4. Народность и родной язык населения СССР*. М.: Издание ЦСУ СССР.

————. 1959. *Словари национальностей и языков для шифровки ответов на 7 и 8 вопросы переписного листа (о национальности и родном языке)*. М.: Госстатиздат.

————. 1978. *Словари национальностей и языков для шифровки ответов на 7 и 8 вопросы переписных листов (о национальности, родном языке и другом языке народов СССР) Всесоюзной переписи населения 1979 г*. М.: ЦСУ СССР.

Шкода В.Г. 2009. Погребальный обряд зороастрийцев // *Митра*. № 10. С. 196–203.

Шохуморов А. 2008. *Разделение Бадахшана и судьбы исмаилизма*. М.: ИВ РАН.

（英語）

Bekhradnia, Shahin. 1994. “The Tajik Case for a Zoroastrian Identity,” *Religion, State and Society* 22 (1), pp. 109–121.

Bliss, Frank. 2006. *Social and Economic Change in the Pamirs (Gorno-Badakhshan, Tajikistan)*, trans. Nicola Pacult and Sonia Guss, London: Routledge.

Daftary, Farhad. 1990. *The Ismā‘īlīs: Their History and Doctrines*, Cambridge: Cambridge University Press.

Dudoignon, Stéphane A. 1998. *Communal Solidarity and Social Conflicts in Late 20th Century Central Asia: The Case of the Tajik Civil War* (Islamic Area Studies Working Paper Series, no. 7), Tokyo: Islamic Area Studies Project.

Foltz, Richard. 1998. "When Was Central Asia Zoroastrian?" *The Mankind Quarterly* 38 (3), pp. 189–200.

Kalandarov, T. S., and A. A. Shoinbekov. 2008. "Some Historical Aspects of Funeral Rites among People of Western Pamir," *Anthropology of the Middle East* 3 (1), pp. 67–81.

Kawahara Yayoi and Umed Mamadsherzodshoev. 2013–15. *Documents from Private Archives in Right-Bank Badakhshan (Facsimiles; Introduction)* (TIAS Central Eurasian Research Series, nos. 8, 10), Tokyo: TIAS, NIHU Program Islamic Area Studies, University of Tokyo.

Mastibekov, Otambek. 2014. *Leadership and Authority in Central Asia: The Ismaili Community in Tajikistan*, London: Routledge.

Scott, D. A. 1984. "Zoroastrian Traces along the Upper Amu Darya (Oxus)," *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland (2),* pp. 217–228.

Uyama Tomohiko. 2010. "The Roles of Small Regions in Intercultural Relations and Conflicts: The Bökey Horde, Gorno-Badakhshan and Abkhazia," in *Eurasian Perspectives: In Search of Alternatives*, ed. Anita Sengupta and Suchandana Chatterjee, Delhi: Shipra Publications, pp. 64–77.

（邦語）

宇山智彦 2013「ロシア語文献から見るパミール近代史：研究の歴史と論点」澤田［2013］、5–10頁。

————．2016「周縁から帝国への「招待」・抵抗・適応：中央アジアの場合」宇山編『ユーラシア近代帝国と現代世界（シリーズ・ユーラシア地域大国論 4）』ミネルヴァ書房、121–144頁。

澤田稔編 2013『近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究：研究成果報告書』イスラーム地域研究東京大学拠点。http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/monka/project/report.pdf

子島進 2002『イスラームと開発：カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容』ナカニシヤ出版。

マーチン、テリー 2011（原著 2001）『アファーマティヴ・アクションの帝国：ソ連の民族とナショナリズム、1923年～1939年』半谷史郎ほか訳、明石書店。

森本一夫監訳、長峯博之解題、北海道大学ペルシア語史料研究会訳 2003「ナースィレ・フスラウ著『旅行記（Safarnāmah）』訳註（I）」『史朋』35、1–29頁。

原著者（ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所）
編訳者（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）